



私は美術批評と共に、ダンス、映像、デザイン、音楽等の現場もレポートしている。とある舞踏公演の打ち上げの席で、藤井マリが突如写真を見せてくれた。「今はやっていないが昔撮ったもので、処分したい」。写し出される世界は、何の変哲もない日常の風景ではあるのだが、事象に注ぐ視点、コントラストの明確さ、構図の特殊性という独自性を強く感じ、展覧会を勧めて実現した。写真家には撮れない写真だ。影では画廊主の吉岡まさみが負う力が支えた。

会場には所狭しと写真が並ぶ。額に入ったもの、剥き出しで展示したもの、大判に引き伸ばす計画もあったが、藤井の生き方そのものが立ち現れている。自己の生き様を捨ててはならない。藤井は苦悩しながらも展覧会を開催した。

それでも藤井は現在の自己の生き方をこの会場で示した。一日は自らが出演し、残りの二日間は稽古仲間が華を添えた。6月22日(金)19:30から、藤井マリ×藤木恵子(朗読)が始まる。写真で埋め尽くされた会場に椅子が轟めき合い、僅かなスペースが舞台となる。藤井は土方巽や大野一雄が生み出した舞踏を独自に開発している。藤木は黒沢美香ダンサーズに所属する若手のホープである。今回は既



存の詩を朗読した。「右、沼地...」。藤井は動かない。「水溜り...」。藤井はスキップのような足取りを見せる。「底の其処...」。その姿勢のまま、



床を移動する。危ういバランスをとりながら時には何かを見詰めるように沈黙し、時には大胆な旋回を繰り返す、これぞ藤井の舞踏という35分の公演であった。

6月23日(土/19:30-) まずは大森政秀というベテラン舞踏家に師事する大倉摩矢子が舞った。扉からストローを銜えて入ってきた大倉は壁面の際に、脛を床に付けながら写真を見据えてゆっくりと通り過ぎる。爪先が聳え立ち唯歩くという困難を示すのが大倉の美しさである。灯体を大倉に浴びせた木村由と入れ替わる。木村はEiko&Komaとの出会いによって人生を変革した。舞台の壁面に背を着け痙攣し、体を開いていく。生きている存在を問うのが木村の舞踏の持ち味である。写真に見入り、擦る様に体を絞る。緩急をつけたステップを踏むと、入っていた大倉と向き合い、二人は奥のドアへ消えていく。34分の出来事だった。

6月25日(月/19:30-) 田山明子は美学校で笠井勲に学んだ実力者だ。「嵐来るよ!」、叫びながら地団駄を踏む。「でも僕は行かなくちゃ...」。曖昧な台詞を交えながら、田山の特質であるステップを踏み続ける。それは状況を凍結し物語を緩和する、極めて美術的な舞踏と言えよう。遠藤寿彦は哲学的思惟を積み上げ、自らの体に反映する。吊り下げたロボットと共に舞い、画廊のペランダに飛び出して身を絞り込んでいく。転地を反転させるパタイユ的思考回路と動作は、遠藤ならではの舞踏である。40分程の公演だ。

藤井はやるのが沢山と知らしめた、10日間であった。

